

一 西船・東馬

▲ようやく地方的な政治的勢力が強まってきたころの弥生中・後期における青銅器の分布相は印象的でさえある。まず青銅器の出土地域である西日本と、その無い東日本（有角石器をもつ地域）とに分かれる。そして前者は瀬戸内海の**児島半島付近を境界**として、それ以西の「銅利器」地帯（銅矛・銅戈・銅剣）と、それ以东の「銅鐸」地帯とに分かれる。これはまさしく、瀬戸内海を**鳴門と豊後水道との東・西二方から出入する潮流の分岐点に**相応じている。

▲朝鮮の稲作文化は、それが海峡をこえた北九州の稲作文化とともに、東南アジアの古い稲作文化圏——揚子江流域からインドシナ半島（越南ベトナムなど）にかけての文化——にその源をもつ**南方的要素の濃いもの**である。かくして問題は、やはり日本の先史古代（弥生時代）における稲作（コメ）の渡来（経路）のことにも関連してくるが、そのにない手こそおそらく「海部あまべ族」であっただろう。・・・・・・東日本と西日本との相違が、「馬と船」とで象徴されるという私の考えは、**西日本の文化圏が瀬戸内海の“潮流”によって理解されるべきだ**ということにおちつく。そしてこの**内海潮流を利用して活動したものたちこそ、古代の「海部族」たち**であろうとの推定が、しだいに私の心につよく焼きついていった。

三 蛇神をめぐる人々

▲**八幡やた大神がじつは蛇神であった**と伝えられることは、私たちにあらためて八幡神の発現を考えなおさせずにおかない。さいわいに『宇佐宮託宣集』全十六巻が、宇佐・中津・大分など各地の八幡宮にのこっている。その各巻は、「吾名護国靈験威力神通大自在王菩薩」のそれぞれの一字づつをとって巻名としている。・・・・・・この大神が初めてその神験を現じた地は、（宇佐の西隣りの）下毛郡野仲の大貞・三角ノ池（いま中津市となる）においてであった。八幡神の出現において、このことはすこぶる重要な意味をもつ、とおもわれる。日本史の展開にもまたこれが大きな影をなげかけることになるのではないかと考えられるので、しばらくこれについてみたい。同じく『託宣集』霊五の巻に、隼人征伐のときの神託として、「下毛郡野仲の勝境、林間の宝池は、大菩薩の御修行の昔に、湧出した泉である。東西四五町、南北十余町ほど……。霊本・薬草が生おい茂って近づけず、果実・鳥獣が多く集っている……。林を出れば日月の下、林に入れば天地の外、ある時は**霊蛇が気を吹て**晴天に雲をなし、それが**ある時は鳥と化して光を放ち**暗夜が昼のようになる……。この宝池は一面にして三角をなし、薦（マコモ）が茂っている……。この薦をもって御枕となし、百王を守護するの誓となす……。」この宝池は八幡神の遊化するところであり、このマコモを御神験とするようにとの神託がなされたのである。

▲鍛冶と蛇神との関係は、中国と同じく日本の古代史においても当り前のことだったようである。例の大和・三輪山（蛇神婚）<下に引用者による注あり>の麓に神武大皇妃のタタラ媛ひめ（原文ではタタラに傍点）らをまつる狭井神社があること（サイ＝サビ＝砂鉄）もまた、これと同じだと考えてよいだろう。そして蛇神の呼び名が、時代によってまた場合によって異なることが、いま問題としている点でもある。そしてまた「**霊蛇、鳥と化す**」のことも、これが日本だけでなく**世界にひろがっている**という（W.Locher『The Serpent in Kwakiutr Religion』、金関丈夫先生の御教示にあずかる）。『宇佐宮託宣集』に見えるだけでなく、現在の伝承としても「ニワトリの脚のざらざらしているのは、むかし蛇だったときの名残りだ」などいわれているのである（これは大分地方だけのことではないだろう）。

<引用者による注>

蛇神婚については、「蛇体の神と卵」（→<クリックしてください><http://oomiwa.or.jp/about/kamigatari/#linktop>）ご参照

▲『託宣集』の記している内容を示すような地名や伝承や社祠などが現存している。**トビ・トメ（トベ）などの呼び方が、やはり蛇神をさすもの**としてあっただろうことを示している。そしてこの八幡『託宣集』によって「蛇神」が「化して鳥となる」ということからして、白蛇→白鳥（また**金色の蛇→金色の鳥、トビ**）となる図式があること、すでに明らかになったといえよう。

▲神武の東征

瀬戸内海をめぐる多くの地方に「蛇神」信仰が存することは、現在の俗信（憑きもの神）に例をとってみるだけでも十分にうかがえる。それが記・紀その他の古文獻についてみると、近畿一帯にもひろく見られることになる。さきにふれたトビトベ（またトミートメ）などのつく神名や人名が多くあらわれることからはじめよう。まずは**神武天皇と崇神・垂仁天皇の条に集中してみられる**ことが注目されよう。豊後水道から椎根津彦（またの名、ウズ彦）を水師啓開の先導として瀬戸内海を東した神武天皇は、浪速から大和に入ろうとして、長髓彦（またの名、登美彦）なる者にさえぎられて引返し、南下して紀伊の名草にいたって名草戸畔（トベ）という者を誅し、さらに熊野の荒坂（また丹敷にしき浦）にいたって丹敷戸畔（トベ）を誅された、という。

▲カジリの祭儀

熊野から吉野をこえて大和平野に入った天皇の軍は、磐余村（イワレ）に拠る兄磯城えしきの軍に妨げられる。ここに天皇は自ら祈りたまひ、夢に天神の教えをうける。かくて天ノ香山の赤土はに（朱）を採り、祭祀をこしらえて、丹生川上に「天神地祇を敬い祭って、巖ノ呪誼（イツノカジリ）をなし」給うた。カジリとは「神に祈って、人を誼のろう」ことである（書紀）。「朱土の靈力」を利用して天神地祇をまつり、それによって人を誼うこと、すなわち**カジリ**の祭儀こそは、古代社会にあつてまことに重要な司祭者のつとめであり、特殊な政治的・軍事的能力なのであつた。だからこそ書紀のこの条における描写は、まことに精細をきわめ、かつ生き生きとした表現にかがやくのである（シャーマニズム、そして朱のマジック）。神功皇后の三韓征討にさいしても、これと同様な神憑がかりが伝えられ、一大異彩を放つてい

▲登美彦と金色のトビ

さていよいよ南から大和に入った天皇は、ここに長髓彦（またの名、登美彦）を撃つことになつた。しかしどうしても勝つことができない。その時である!! たちまちにして氷雨がふりはじめ、はるかに「金色の靈鵄（トビ）」が飛び来つて、天皇の弓の弦はずにとまつた。その鵄の光りかがやいて流電のごとく、長髓彦（登美彦）の軍兵は眼がくらんでしまった。これを鳥見とみ村というのは、鵄の村というのが訛なまつたのだ（書紀）という。現在では富雄（トミオ・トミノオ）となっている。この一文の真意を考えると、じつはつぎのごとくであろう。すなわち、**金色の鵄は、本来は登美彦のトーテム——生駒山の山ノ神——**ではなかつたか。登美彦の名（登美）と鳥のトビと通ずることである。しかもこれは、さきにも記したように『宇佐宮託宣集』に八幡大神の発現として、「**靈蛇、化して鳥となる**」のことがあつた。そしてこの**靈蛇をトビ（あるいはトベ）とよぶ**こと、そしてまた緒方・佐伯氏の大蛇神婚の説話にもあるように「富トビ之尾」明神と祀られたこと、これらによつてみても、**登美彦の「登美」というのはトビすなわち大蛇神（生駒山の山ノ神であり、登美彦のトーテム）であつて、それが時に「化して鳥（トビ）」となつた**ものであろう。**金ノ蛇→金の鳥（トビ）、また白蛇→白鳥の図式そのままの典型的な実例**の一つである。そのトビが登美彦の側から飛び移つて、天皇の弓にとまつたのである。こうなつてはもはや登美彦は、天皇軍に敗れざるをえなかつた。書紀の一文の真意は、こういうことではなかつただろうか。

▲蛇神をトビ・トベとよぶことのほかに、なお**ナガ・ナガラ**の呼び名もあつたらしい。……鹿児島県の甕島こしきじまには、いまでも子供たちが泣いたりするとき「ナガラ蛇（原文ではナガラ蛇に傍点）が来るぞ」といっておどかすと、子供はたちまち泣きやむ、と言われている。ナガラ蛇の実体は青大将の大蛇のことだそうである。神武東征で長髓彦（＝登美彦）を征したのち、層富の波多丘に新城戸畔（トベ）を、和珥坂下に巨勢祝を、さらに臍見の**長柄丘**（ナガラ）に猪祝を誅したとされている。新城トベ（人名）はさきの**トベ（＝蛇神族）**であろうが、この長柄丘の地名もナガラ（蛇神）のことだと思われる。

▲木曾川の西を南流する長良（原文では長良に傍点）川（ウ飼いで有名）や大阪市北の淀川にかかる長柄（原文では長柄に傍点）橋（人柱伝説で有名）などもあるが、もっとも良く**ナガラ＝蛇神**を示しているのは、琵琶湖の南端（大津市）の三井

寺であろう。**三井=巳(ミイ) —蛇である**ことは当然であるが、元来この寺がつくられた山を長等(原文では長等に傍点)山(ナガラ)といい、その神社を長等神社(原文では長等に傍点)という。正月に数十mの**永い縄(大蛇を意味する)**をひっぱって町中をねり歩き、さいごに神社で巻きあげるといふ。全国各地でみられる「**綱引き**」の行事も、それが**もともと大蛇神をまつるもの**であることを意味している。蛇神の名称はいろいろと変っていたり、あるいはそれがまったく忘れられていても同じである——たとえば奈良平野であちこちに見られる「野神さん」など——。大津の長等(ナガラ)山・長等神社が、のち三井(ミイ=巳)寺にとってかわられても、やはり「蛇神(原文では蛇神に傍点)」のことだけはその名称にのこされている例として、この三井寺はおもしろい。

▲ナガラには長良・名柄・長等などの宛て字が多いが、永原(ナガアラ)などの場合にも本来はナガラだったと思われるものが多い。また長峽(ナガオ)・永尾などもやはり、大蛇の尾の意(トビのオと同義)として考えられることが多い。その点からいえばやはり「ナガ」・「ナカ」(原文ではナガ・ナカに傍点)が地名その他にのこされていることに注目しなければならないだろう。筑前の那珂郡(原文では那珂に傍点)があり、福岡市西の姪浜町に「名柄川(原文では名柄那に傍点)」がある。そして博多の那珂にもこの名柄川口にも、ともに住吉神社が存している。摂津の長峽(ナガオ)におに住吉神がまつられていることも考えあわせると、**ナガ(ナガラ・ナガオ)神と住吉大神とのむすびつき**にはすこぶる暗示的なものが感ぜられる。那賀郡(あるいは郷)などの地名は全国的に多いことであり、いずれは**住吉神=海神族**の東漸とともに、その地名もまた東漸したものであろう。

▲そして**ナガ=ナーガの転**であるとすれば、インドからインドシナ半島での**ナーガ蛇(蛇神)**のことが当然に思いうかぶ。インドの仏蹟におけるクシナガラ(地を)はじめ、あるいはナーガールジュナコソダ出土の石板にみられるナーガたち、(竜王は、八頭の蛇の首からなる光背をつけ、ナーガ王妃のほうは一頭の蛇の首をつけている。首かざりのように巻いているのをみると、曲玉の原型をしのばせる)、またインドシナ半島ではアンコール・トムのナーガが知られる。城門前に、多頭のナーガの胴を抱えた神像が、橋の欄干のように並んでいる。この**ナガが那賀・那珂・中などの宛て字**で、いずれも同義である……。

▲**トビ・トベ(またトミ・トメ)・ナガ(ナカ)・ナガラ・ナガオ、さらにミワ・ミイなどの呼称が、いずれも古代にあつて「蛇神」の謂だった**ことをあらためて確認しておく。

▲中臣氏の中臣もじつは「ナガとトビ(トミ)」との結びついたものであろう。そのことが中臣氏をして祭祀を司る氏族の王たらしめた所以ではなかつただろうか。中臣氏に対して勢力を争った斎部氏が、その祖先の功業を誇るために記された『古語拾遺』のうちに、神武帝の功臣として天宿命をもち出しているのは、トビ・トミ(=蛇神)の記憶、がのこっていたからであろう。そしてナカ(中)がじつはナガ・ナガラ神であることがすでに忘れられていたのかもしれない。だから「中」トミに対して「天」トミをもってこれに対抗しようとしたのではあるまいか。

▲トビ・ナガラについて二つの問題がうまれる。一つはトビ・ナガラが「蛇神」の謂であり、それが**真朱や銅・鉄などの「金属」とむすびついている**ことである。また丹生・高野明神(猿神?)として、**真朱(水銀朱)とむすびついている**こともある。

▲八田とは何か。各地に多く存している八田の地名を、ヤタあるいはハッタと読ませている。**ヤタと呼ぶ地名には、また矢田の字をもってするところもある**。八田をヤタと読むばあいには、西日本の方言からすれば正確にはヤアタと読むべきであろう。一・二・三……七・八の読み方が、ヒイ・フウ・ミイ……ナナ・ヤアということや、また関西で木をキイ、蚊をカア、巳をミイということ。このように引きのばして発音することからすると、八田はヤアタの宛て字であつたと考えられる。矢畑という地名も同音であろう。そして……八田ヤアタとは蛇族をさしているのではあるまいか。……八田はヤアタ・ヤアタロ(蛇)であろう。……現在では人をさして、サルとかヘビとかいえば、これは単なる蔑称のように思われがちだが、どうもそれだけで片づかないものがありそうだ。というのは、いまでもサルは山ノ神の使いとして、獵師も絶対に殺さない。またヘビの中でヤアタロ(青大将)は、これを神の使いとして殺さない風習が強くのこっている。サルもヤアタロも、ともに神の使いとしてあがめているのである。往古にさかのされば、これらの信仰

にはさらに強いものがあっただろう。日本神話にも、サルタヒコやヤマタノオロチまた大ミワの神などの物語が存しているし、『今昔物語』に「今は昔、美作国に中参（中山大神のこと）、高野と申在ます。その神の軀は、中参は猿、高野は蛇にてぞ在ましける。」とみえている。ここにもサル神・ヘビ神としての尊信がつづけられている。

▲八田（矢田）また矢畑（八幡）などの地名がじつはヤアタ・ヤワタであり、それはいまヤアタロ・ヤワタロとよばれる蛇神（青大将蛇）にほかならないものであると考えられる。そしてさきにも記したように、ナガ（ナガラ・ナガオ）と住吉大神とがむすびつくように、ヤアタ（ヤワタ）とはそのまま八幡大神に通ずるものである。ヤワタに八幡の字を宛てたことからヤアタ・ヤワタ→ヤハタとなり、さらにハチマンとなったのである。

五 蛇神と金属文化 —とくにカリカル（銅）—

▲これまでながめてきたように、古代社会における蛇神の活動はいちじるしいものがあつた。そしてトビ・トベ（トミ・トメ）またナガ（ナガラ・ナガオ）の発見、さらにヤアタ（ヤワタ）、そしてすでに知られるように三輪ノ神（ミワ・ミイ）の活動など、各地にひろくみられるところであつた。大和平野の三輪ノ神が、神武天皇にかかる二人のタタラ媛の名にみられるタタラとの関連もあつて、鉄文化とふかく結びついていそうなことは、すでに多くの人々から指摘されてきた。そしてこの媛をまつる社が「狭井社」であり、サイ＝サヒ＝砂鉄であろうとすることからすれば、蛇と金属（鉄文化）との関係はいちおう認められるだろう。ところが前記のトビ（トベ）・ナガ（ナガラ）などの蛇神を追いかけているうち、私はそれとともにカリ・カル（またコリ・コル）の名称がいつもトビ・ナガラにまつわりついて見出されることに気がついた。人名や地名、また伝承などに数多くのカリ・カル（コリ・コル）が私の知見にのぼりはじめ、そしてしたいにカリ（カル）がトビ・ナガラと深い関係がありそうだとわかってきた。結論からさきに言うと、カリ・カルは、じつはカネの古語（？）であり、主として「銅」をさしていたらしい。あるいは韓語のKuri（銅）の義ではないかとも思っている。ともかく銅文化との関係が濃厚になりそうに思われはじめたのだ。

▲トビ・ナガラ・ヤアタなどの蛇神がむしろカリ・ガル（本来的には銅）とつよく結びついているようにみえるのと、ミワの蛇神がはっきり鉄と結びついているのと比べてみると、いますこし研究をすすめて「銅から鉄」への変化と、それぞれの蛇神との結びつきについて、古代氏族との関係を通して考えなおしてみる必要がありそうだ。これが弥生式末期の諸小国から古墳文化の統一王朝への発展と、はたしてどのように関連するものか、問題は意外に深刻なものであるように思われるが、いまはしばらく措こう。さて、奈良平野の西部では、大和川の諸支流が合流するが、ここに北から流れる富雄とみのお川（いま富ノ小川などと記す。富雄町と鳥見山＝鷓山あり）が合する地点に、法隆寺・竜田神社のあることが印象的である。この寺をイカルガ寺・イカル僧寺というが、イカルとはイカリと同じくカルをあらわすものであろう。何故にこういう呼び名がつけられたのだろうか。この地に富とみ郷村がある。また竜田社の所在は那珂な郷であつて、社神にはシナトベ命みことを祀っている。ここにもトビ・ナガとカルとの関係ふかいさまを想見させる。

▲ヤワタ（八田・矢畑）の蛇神が、豊前の宇佐を中心となる八幡やわた大神であろう……。八幡神が八頭の大蛇神とされることからすると、あるいはヤマタのオロチもまたヤワタのオロチ（大蛇）と同義からの転訛なのかもしれない。そしてこの神は、おそらくもっともはやく活躍したものではなかったかと思われる。その後、ナガ（ナガラ）神＝住吉大神の活動となった。これが神功皇后（オキナガ）の活躍と終始しているのである。その後さらにトビ神の活動によって代られた。その初現が宗像の神ではなかったかとも思われるが、まだ確信がもてない。ウサの宗像の地に天降った伝承など、いますこし研究する余地もありそうだと思っている。いずれにしろヤワタ→ナガ（ナガラ）→トビ（トベ）の順序で、氏族勢力が交替していったものであろう。功皇后の征韓のときにも見える中臣氏、その後、朝廷の祭祀の中心となった中臣氏であるが、これはナカ（ナガ）とトミ（トビ）とが一緒になった称呼にちがいない。斎部いむべ氏が神武天皇のときに活躍した祖先として天富命（原文では富に傍点）をかつぎ出したこと（『古語拾遺』に見える）は、すでにナカ＝ナガラ蛇神のことが忘れられて、トミ＝トビ蛇神が当時の主力となっていたことをおもわせる。ヤワタ→ナガ→トビという海人族＝蛇神族の、それらの勢力の移りかわりが知られるような感じがする。そしてこの氏族ははじめむしろ「銅」とつよく結びついているようであり、祭祀集団として活動していた（シャーマニズム）。日本の古代史上に活躍した「海

部」の諸氏族を考えてみたいのである。そして古代史におけるシャーマニズムが、神武天皇の大和乎定や神功皇后の征韓の故事に「カジリ」（カジ・カシ）の神事として伝えられること。ここに日本における神憑がかりして祭祀＝政事をおこなうという神政の一端がうかがわれ、その場合に「銅鏡」と「真朱」のマジックが十二分にはたらいだ。これがのちのち漁人～海部族の習俗にながく伝統をのこしていることに注目したい。また彼らがいまだにつよく蛇神の俗信をもちつづけていることもある。このあたりに（蛇神とそれをめぐる呪術とのなかか）、古代社会のジャングルをたどる道がひらけているように思われてならない。

六 卑弥呼の“鬼道”

▲これまで数多くふれてきたように、日本の古代社会をさぐるとき、各地で（おもに西日本で）蛇神の活動がいちじるしく感ぜられる。それは、文字通り「神」であると同時に「トーテム的」ともいえるものである。そしてまたその活動が、夢告や神憑がかりによる呪術（カジリ）だと考えられてもよいだろう。トビ・トベ（その変化としてのトミ・トメ）、またナガ・ナガラ（それからのナカ・ナガオ）、さらにヤワタ（訛りとしてのヤアタ・ヤタ）、ミワ（ミイ）などの名前でもよばれる神々が存すること、それはもちろん人名としても記・紀その他に多くみられること、また古くから地名としてもよばれていること、さらに俗信としても多く現存して認められることである。神武天皇の東征で、紀伊・熊野また大和の各地で土曾の名前にみられ、ことに登美彦（トビ・トミ）の物語など典型的である。ついで崇神・垂仁天皇の条に集中している。古事記の崇神条に、美和みわ山の蛇神が壮夫となって通かよった話などあまりにも有名である。垂仁条には、皇后サホ姫の兄サホ彦の叛乱についての物語がある。すなわち、皇后が兄から天皇を殺せといわれ、膝枕して寝んでいた折りに、小刀をふり上げたが刺し得ず、つい涙をおとした。天皇が目覚めて「いま夢をみた。サホのほうから暴雨がやってきて顔をぬらした。また錦色の小蛇が頸にまつわりついた。これはなんの印だろう。」と問うたので、皇后はついに兄の叛く心を申上げた……。これも夢告である。錦色の小蛇は、小刀のことでもあろうが、やはり特別の意味もあるだろう。俗信としての蛇神も「金色の小蛇」であり、さきにしるした八幡やわた大神の発現も「金色の蛇」としてあり、神武東征のトミ彦も「金色のトビ」であった。崇神天皇は紀伊の荒河戸畔とへの女を妃とされ、その御子が豊鍬入姫命（伊勢の斎宮となった）なのである。六十年、出雲振根をほろぼしたことで大神が祀られなかったとき、丹波の水香戸辺かたとべの小児の神託で、鏡と玉とをもって大神をまつたという。垂仁天皇は山背の大国不遲ふちの女の綺戸辺かむはたとべを召し、また刈幡戸辺かりはたとべをめめされている。さきのサホ姫についてみると、その父の名は日子坐王であり、王が春日建国勝戸売とめの女たる沙本之大閼見戸売との間に生まれた子女なのである。この王はまた山代の荏名津比売（またの名を刈幡戸弁）をも娶っている。（トベ・トメなどの名は、すでに見たように蛇神の謂であり、これをその名前のうちにもっている人々である。なんらかの意味で「神意」と通じあえる人々のようである。）トベと同じようにナガ・ナガラ蛇神のこともいろいろ認められる。さきの、サホ姫が生んだ御子、その年長じても物を言えず、出雲大神のタタリということを出雲に詣でたが、その帰りに突然くちがきけるようになった。そこで皇子は肥長ひながが姫と結婚したが、その時のぞいてみると大蛇であった、という。肥長姫の名でわかるように、肥ひノ川のの長姫である。長＝ナガ＝ナガラ蛇の謂であることをそのまま名前に明示しているのだ。ナガの名のつく人々がその後も多く活動するが、その圧巻は息長帯姫おきながたらし＝神功皇后であり、三韓征討の物語りにおいて、筑前のノ県（いま的那賀なかつ郡）の住吉大神の御加護をうける。オキナガの姫が、ナガの神（住吉大神）の庇護をうけるのである。ナガと住吉大神との結びつきが強調されている。そして皇后の名のオキナガと、住吉神の坐すナガとが偶然の符合でないだろうことは、その後の凱旋と、住吉神の東上（地名がナガ・ナガラ・ナガオなどとなっている）とによってもはっきりわかるだろう。（そしてナガ・ナガラ蛇神は、そのままインドからインドシナ半島にかけて、今日でもあるいは蛇神とて祀られ、民族名や地名にも残存していることから、日本の歴史的風土を考えあわせたい。九七頁参照）

▲神功皇后が、書紀において“女王卑弥呼”として擬定されていること、また皇后が“神憑りの巫女王”とされていることに注目しなければなるまい。神功皇后が女王卑弥呼にあてられていることの当否は、いまはしばらく措こう。皇后が三韓征伐で示された神憑り（いわゆる政事・軍事と一体なるものとされた祭事）こそ、日本の古代社会における重

要な行事として考えられるのである。そしてこれが魏志の倭人伝にみえる女王卑弥呼の「鬼道に事えてよく人を惑わす……、男弟あり、たすけて国を治む」の一文にみえるような、女王の“鬼道”の内容を明らかにすることにもなるだろう。(鬼・鬼神とは、①祖先の霊をいい、②天地・山川・動物などにも宿る、超人的威力。出石誠彦氏「鬼神考」を参照)

七 女王国はどこか

▲これまでながらくみてきたように、記・紀その他の古文獻をはじめ記録や伝承に知られる多くの「蛇神」たち、また西日本にひろがる憑きものとしての「蛇神」信仰、ここにながしい歴史的伝統を感じさせる。それがシャーマニズムといえる祭政であるだけに、ひろがって「卑弥呼」の鬼道と通じあうものともいえよう。蛇神シャーマニズムであるだけに、それは南方系の要素がつよく、これに大陸からの影響が加わって、北九州の一角を中心として瀬戸内・近畿にとひろがっていったものであろう。問題はいつしか卑弥呼＝邪馬台国までひろがってきた。ご承知のように邪馬台国がどこかは大きな学界の謎とされている。私のふれた今までの材料だけでは女王「卑弥呼」が都した「邪馬台国」の地がどこであったかはわからない。西暦三世半ばという時点において、魏志の記す倭人の諸国をはっきりさせるためには、やはり原典の『魏志東夷伝』そのものについて厳密に追いかけてみる必要がある。そのさい、「邪馬台国」をめぐる当時の国名が今もお地名として存していることを、まずその追求の手がかりとすることは、それなりに正しいとおもう。しかしその地名には、地形や交通を示すものもあり、また他の文化的なものにかかわるものもある。あるいは、当時の社会にあつて特殊・重要な地位をしめる部族名やまた宗教的なものなどが示されていることもある。だから、現存する地名にばかりとられるのではなく、その地名がもつ意味を明らかにすることによって諸国の地をさぐることも考えるべきではないか。

引用者：下掲文書もご参照

トビ・トミ＝ナガ＝蛇神 (<http://pdffile.cocolog-nifty.com/blog/files/49.pdf>)

<この文書は、「**生駒の神話**」(下記 URL をクリック)に掲載されているものです。>
<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>